

ふるさと
の 101
誇り



子どもの心の扉を開く
世界の童話を翻訳した言語学者



もうすぐ12時だよ。
いそがなくなっちゃ

大人になるまでに出会いたいくつもの物語があります。凍てつく教会の中で、固い絆で結ばれ、寄り添いながら最期の時を迎えるネツロとパトラッシュ。温かな救いを願わずにはいられません。家族からしいたげられた心やさしき女の子は魔法のガラスの靴が縁となり王子様と結ばれます。こんなサクセスストーリーには心躍り、オオカミに食へられてしまった子ヤギを救う母ヤギの大胆な救出劇には拍手喝采、お払い箱となった4匹の動物たちが知恵をしぼり協力して泥棒を撃退する物語には、ほっとした気分になりました。

こうした『フランダーズの犬』や『ピノッキオ』、アンデルセン童話の『マッチ売りの少女』『みにくいアヒルの子』『人魚の姫』『氷の女王』、グリム童話の『シンデレラ』『白雪姫』『ブレーメンの音楽隊』『オオカミと7匹の子ヤギ』などなど、今では誰もが知っているヨーロッパの童話を翻訳し、日本の子どもたちの心の扉を世界に開いたのが、南アルプス市十日市場出身の言語学者、矢崎源九郎です。

源九郎は、1921年十日市場で矢崎銀行を経営する矢崎家に生まれ、東京帝国大学卒業後、若くして東京教育大学(現在の筑波大学)の助教授を務め、英語

左が源九郎さん、右が奥様で西落合出身の百重(旧姓新津)さん。中央は長男の滋さん。奥は源九郎さんのお母様で河西豊太郎さんの妹ゆふさん。原稿の清書は奥様がなされ、夫婦二人三脚で著書が仕上げられていたそうです。
(思い出/写真:新津環さん)



こんなあたたかい家族に生まれたかったわ



お母さんだよ。
お手てが白いでしょ



お母さんだー!

ドアあけなさい

あやしいよー

はもとより、ベルマ、ドイツ、イタリア、北欧諸国など多国の言語を修めました。言語学者の第一人者が、なぜ数々の童話の翻訳に力を尽くしたのでしょうか。1947年出版の『アンデルセンの童話I』のあとがきに次の言葉が残されています。「お父さま、お母さまへ」わたしたちは、いままでに一度も経験したことのない敗戦というものを味わいました。わたしたちの目の前にあった古い世界はくずれさって、新しい世界が生まれていくのです。そしてこの明るい未来への希望は、なによりもまず、小さな子どもたちの上にかかっています。わたしたちは、子どもたちが、美しく、りっぱに育っていくようにと願いつつ、子どもたちの力となり、なぐさめとなるような心のかたをもあてえてやらなくてはなりません。」

源九郎は生まれつき胃腸が弱く、45歳の若さで亡くなりました。しかし、その短い人生の中で、残した著書は100冊ちかくあります。その物語を読むと、源九郎が「ことば」に紡いだ思いが、私たちに迫ってきます。
文/イラスト 文化財課
※矢崎源九郎訳の童話は市立図書館でも読むことができます。